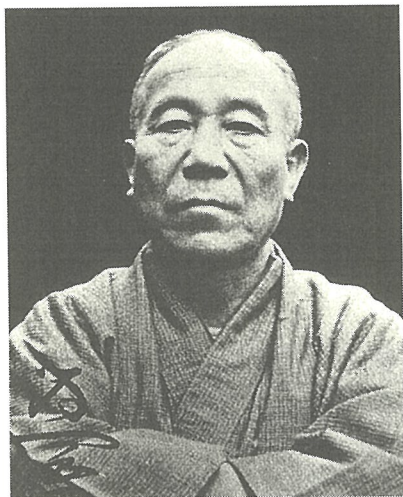


留岡幸助と新島襄



井 上 勝 也

明治・大正・昭和の初めにかけて我が国社会事業の開拓者的存在であった留岡幸助（一八六四—一九三四）は同志社英学校の卒業生である。彼は、新島襄が明治二三年を期して同志社大学を設立しようとして東奔西走し、教室で教えることが殆どなかった頃の学生であった。しかしながら留岡の七〇年の生涯を繙くとき、明治十八年から二十一年までの同志社での三年間が如何に大きな意味をもっていたかを知ることができる。

この小論文は留岡が同志社では何を学んだか、とりわけ新島からどのような感化を受けて彼の畢生の事業を選び、その実現にただ一筋の道を歩むことになったかを考

えてみたい。逆にいえば、当時の同志社は、そして新島はどのような人物を育成しようとしていたのかを問題にすることになる。

留岡は明治十八年九月、同志社英学校別科神学科邦語神学課程に入学した。邦語神学は「基督教ノ教師ヲ養成スル為メ邦語ヲ以テ神学ヲ授ク」課程である。彼は既に少年時代から同志社関係者に出会い、予定されるように同志社英学校に入学したといえる。即ち明治十二、三年、十五、六歳の頃であるが、彼の故郷岡山県高梁の地にアメリカ人宣教師や日本人伝道者がキリスト教の宣教にやってきた。それは後年同志社で教えることになるケーリー (Rev. Otis Cary, 1851-1932) であり、同志社病院長になるベリー (Rev. John Cutting Berry, 1847-1936) であり、同志社英学校第一回卒業生の金森通倫であった。留岡の小学校の教師二宮邦次郎は明治十三年新島襄から受洗し、同年四月から同志社英学校別科神学科速成コースで学んだ人である。新島自身も明治十三年二月高梁の地に伝道に来ている。留岡は同志社関係者からキリスト教に導かれ、明治十五年七月、十八歳のとき高梁教会で受洗するが、養父に強く棄教を求められ、折檻を受けた。彼は迫害を逃がれるために翌十六年二月家出し、京都同志社にやって来て、約一カ月、当時「参拾番教室」と呼

ばれていた建物の二階の寮に潜んでいたが、このときのこと新島の日誌（明治十六年三月二八日の項）に次のように記されている。「備中高梁ノ信徒富岡達介（傍点筆者）ナルモ父ノ迫害ヲ蒙リシニヨリ脱走シテ此地ニ来ル」。留岡は毎夏伝道にやって来る同志社の学生や同志社関係者から同志社のこと、新島のことを聞くにつれ、キリスト教主義の同志社へ行けば保護され、あわよくば入学が認められるかも知れないとの期待を抱いたのである。彼の期待は実現せず、今度は岡山の金森通倫やケーリーの世話で今治に逃げることになった。当地には金森の親友で英学校第一回の卒業生でもある横井時雄が伝道活動に従事しており、彼のもとに匿われることになったのである。今治で留岡は約二年間横井を助け、また自ら地方の開拓伝道に従事するが、この間キリスト者としての試練に耐え、自己の生き方を模索するうちに、将来キリスト教を同胞に宣傳するための牧師になることを考え始めた。丁度そのとき、彼は新島が明治十六年に公にした「同志社設立の始末」を読む機会に恵まれ、新島の密航、渡米留学、帰国、同志社英学校設立にまつわる苦勞を知り、感涙にむせている。^②

既にキリスト教をもって自己の人間観・世界観にしている留岡は、いわば学ぶための器をもって、明治十八年

同志社英学校に入学した。当時校長の新島は健康の回復と大学設立のための募金を兼ねて欧米を旅行中で、その年の十二月十七日に帰洛した。新島は翌日早速午前九時半より礼拝堂の定礎式をおこない、十一時より書籍館(現有終館)の定礎式、午後一時半より同志社創立十周年記念式典を挙行した。留岡は一年生として出席し、礼拝堂定礎式で新島の次のような説教を聴いた。

此礼拝堂定礎式ヲ施行スル祈禱ヲ神ニ捧クル前ニ当リ、此堂設立ノ事ニ付キ聊カ我意ヲ陳ントス、抑モ教育ハ宗教ト密接ノ関係アル者ニシテ教育ノ基本ハ宗教ニアリト謂フ可シ、故ニ欧米文明諸国何レノ著名ナル学校ニモ礼拝堂ノ設ナキハアラス、且最モ美麗ヲ尽シ十分善良ニ作りアルヲ見ル也、其ハ何トナレバ教育ト宗教ノ関係実ニ一ナル所ヨリ然ラシム、而シテ我同志社教育ハ実ニ基督教ト密接ノ関係アル者ニシテ、今日此定礎式ヲ行ヒ之ヲ神ニ捧献スルハ后来我大ニ喜フ可キ事ナリト思フ、何トナレハ此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者ナレバナリ。^③

新島は九年間にわたって米欧の教育機関を体験し、見學し、キリスト教と全人教育が一体化していることを認識していた。従って同志社教育も礼拝堂を中核に据えるべ

きことを強調しているのである。

留岡は、当日の創立十周年記念式典で、新島が外遊中に放逐された七人の学生を思う次のような熱涙あふる演説を聴いた筈である。

諸君ト共ニ今往事ヲ追想シテ紀念シタキハ、昨年我不在中同志社ヲ放逐セラレタリシ人々ノ事ナリ、真ニ彼等ノ為メニ涙ヲ流サザルヲ得ズ、彼等ハ或ハ真道ヲ聞キ真ノ学問ヲナセシ人々ナレトモ、遂ニ放逐セラル、ノ事ヲナシタリ、諸君ヨ人一人ハ大切ナリ、一人ハ大切ナリ、往事ハ已ニ去レリ之ヲ如何トモスル事能ハズ、以后ハ我儕実ニ謹ム可シ。^④
学生一人一人を大切にせる教育者新島の面目躍如とした演説である。

帰国後新島は大学設立の準備に多忙で、そのために当時の在學生は教室で校長から直接学ぶ機会が殆どなく、時々朝の礼拝で熱烈な説教を聴くぐらいであった。しかしながら先程の演説がそうであるように、新島はたとえ学校を離れ、遠隔の地にあつても彼の心は常に學生一人一人の上にあることを在學生は知っていた。「同志社之近情ハ如何『よしの山花咲く比の朝なく、心にかゝる峰のしら雲』古人歌に詠せし如く、小生之心ハ日夜諸君を忘るゝ能ハす、何事ヲ聞くニ付け而も今ハ諸君ハ如何あ

らんと心配いたし居候^⑤。これは神奈川県大磯に静養中の新島が亡くなる二四日前の明治二年十二月三〇日、学生横田安止に宛てた手紙の一節である。

校長である新島が不在がちの英学校には、熊本英学校でジェーンズ (Leroy Lansing Jones, 1838-1910) に学び、同志社英学校に転学して高い学識と人格を新島によってさらに磨き上げられた卒業生たちが母校の教員として勤めていた。市原盛宏、森田久萬人、浮田和民、下村孝太郎が先輩として、時には寮生とともに生活しながら、単に教師として以上に頼れる兄貴として、学生の良き相談相手になっていた。またアメリカン・ボードの宣教師であるデイヴィス (Jerome Dean Davis, 1838-1910)、ラーネッド (Dwight Whitney Learned, 1848-1943)、ゴードン (Marquis Lafayette Gordon, 1843-1900)、グリーン (Daniel Crosby Greene, 1843-1913) といった人々が百科全書的な博識と教育的情熱、ピューリタンとしての人格及び熱烈な実践的信仰をもって学生達に強い感化を与えていた。

当時の授業は少数科目を集中的に教授する方法を取り、授業は教師中心ではなく学生中心で、開発主義的に進められ、勉強における学生間の切磋琢磨が重んぜられていた。授業は午前八時より始まり、十二時で終わるこ

とが多く、土・日曜日は自学自習及び健康増進、精神修養に当てられて休日であった。従って土曜日は遠足、日曜日は校内のチャペルや自己の属する教会で静かに礼拝の時をもち、安息日を守る学生が多かった。当時学生間に演談会が盛んで、金・土曜日の午後など校内の教室で宗教、倫理、政治上のテーマで英語或いは日本語の演説がおこなわれている。留岡は明治二十年十一月四日、彰栄館で「神六日二天地ヲ創造ス而第七日ニ安息ス」と題する演説をおこない、^⑥同月二五日、礼拝堂で「別科神学連合演説会」が開かれ、^⑦「渾沌河ノ麦飯永ク忘ル可カラズ」と題して演説している。

明治二年二月二九日、留岡は当時の四条教会(現京都教会)で、「婦人と基督教」と題して説教をしているが、彼の日記手帳に説教の要旨が次のようにメモされている。

ペリー氏嘗テ言ヘルアリ。家族ハ帝国ノ基本ナリト。余ハ之ノ語ヲ転シテ、婦人ハ家族ノ基本ナリト云ハシ。何是ト云フニ、茲ニ人々生ジテニ、三人相集リテ家族ヲ為シ、家族遂ニ集合シテ国ヲナシ、政府ヲナスモノナリ。其家族ノ中最モ勢力アルモノハ婦人ナリ。現今内外ノ人々ノ口ニ文ニ喋タスル所ハ、我国ノ家族ノコトナリ。我国ニテハ、純粹ノ「ホーム」

即家族ナシ。若シ国ガ文明国ノ昇平ノ御世ヲ来タサントナレバ、先ズ宜シク昇平和樂タル「ホーム」ヲ造ラザル可ラズ。宜哉、真正ノ家族ナキハ即チ真正ノ婦女子、其家族ノ柱石トモ云フベキ婦人ノナキニヨレリ。^⑨

留岡は、同志社英学校在学中、未だ家父長的倫理の支配する時代に、既に婦人の家庭における地位と家庭の重要性を強調している点に注目したい。彼が後年「家庭学校」を創設して非行少年の感化は家庭の再興にありと叫ぶが、在学中に彼の家庭観が形成されつつあったことを示している。

留岡の人格形成、思想形成に重要な影響を及ぼしたと考えられるものに新島襄及び当時の同志社を支配していた平民主義がある。八歳の時の身分差別の体験を深い心の傷として回想する彼にとって、神の前では全ての人間は平等である」といった人間観を日常の生活の中で最も典型的に実践している人として新島襄がいた。彼が学生に宛てる手紙は全ての学生を無限の価値可能性を有する人格的主体として捉え、教師も学生も同じ人間であり、その間に差別があつてはならないと考えていることがよく判る。新島は卒業生蔵原惟郭に宛てた手紙の中で次のように書いている。

アンドワ フヒレプス アカデミーノ校長バンクロフト氏之閑話中、左之語ヲ聞キ取り申候間、梧下ニ呈ス。我輩ハ生涯先師タラス無智之後弟ナリ。比ノ語最モ生ノ意ニ適ス、生同志社ヲ創立セシ以来、不幸ニシテ先生ト称セラル、是レ生ノ曾テ先生ト称セラル、ヲ好マサレ共亦止ムヲ得サル所アリ、生自今ハ断然無智ノ後弟タルベシ。^⑩

用務員の五平さんに対する新島のエピソードが示すように、彼の平民主義は彼の生き方に定着していた。教育は言葉ではなく態度、行動である。留岡は彼の同志社卒業後の明治二年一月から用いているメモ帳「漫筆走記⁴」に「平民主義」と題して次のように記している。

私ノ主義トスル所ハ平民主義ナリ。平民主義ハ自由平等ノ主義ナリ。平民主義ハ尚水ノ如シ。均一ニナラントスル情性アリ。水ヲ天ニ向テ上ルトキハ之レ地上ニ落ツルトキハ片々ノ玉トナル。成ル程其玉ニ大小アルト雖。

残念ながらこのメモはここで切れている。明治二年といえは丹波教会の牧師時代であり、これは恐らく説教の草稿として書かれたものではなからうか。この短文から留岡が平民主義をもって自己の主義として生きようとしていることが判る。

留岡が在学していた当時の同志社を支配するキリスト教には、人への奉仕こそ神への奉仕であるといった考え方が強くはたらいっており、新島の「世の中の為」という常用語が示すように、キリスト教の応用的実践的活動が重んぜられていた。留岡の卒業した翌年の明治二二年に入学した山室軍平は当時の同志社を横溢していた雰囲気をも「同志社スピリット」―神を愛し、人を愛し、そのために「凡ての者の僕」として奉仕するキリスト教精神―という表現で示している。

留岡は同志社を卒業しておよそ二十年後、次のように新島を憶い、応用的キリスト教の重要性を説いている。

……われらが基督教を信ずる所以は、之ヲ以テ慈善を事実には表はすとか、国家の福祉に貢献するとか、そういう考えからであつた。(中略) 歴史を研究するのは畢竟歴史が教育だからであらうと思ふ。(中略) 然るに現下の基督教界に新島先生程の歴史を持つて居る人があるか。学問の点に於て、説教の術に於て、新島先生に優る人物は決して乏しくないであらう。けれども学問や説教術やは伝道上の唯一の武器ではない。或る意味において人格の別名詞たる経歴其物が不言にして教へ、不文にして化育を与えるのである。比の意味に於ける先生は稀有の歴史を持つて居

た人である。(中略) 見よ其のライフの如何に経歴に富めるかを。あゝ先生のライフ其物が何物にも優りて偉大なる伝道であり、宗教である。^①

留岡にとつて、新島の存在が、彼の生き方全てが模範であり、導びきの星であつた。

留岡は同志社在学中に感化を受けた教師の中で、新島を別としてラーネッドを筆頭に挙げている。

ラーネッド先生は私が同志社で感化を受けた中で最大のものと存候。何時も先生のことは私の頭脳裡に去り不申候。(中略) 私は先生より新約聖書を馬太伝より黙示録までブツ通ふして講義を聞き申候。私に多少でも聖書の智識ありとせば、其れは先生の賜と存候。この賜が如何に私の生涯及私の仕事を潤沢にせしかを思ひ、感謝せずには居られざる次第に候。^②

留岡の在学中、同志社の教員であつた宣教師ゴードンは説教、牧会学を始めキリスト教社会学を担当し、キリスト教の実践的応用として社会事業に学生の関心を向けさせていた。留岡は後年北海道集治監教師就任の際、或いはアメリカ留学、家庭学校の創設などにゴードンの意見と協力を求め、ゴードンも彼に経済的援助をおしまなかつた。

留岡が学んでいた同志社に、監獄改良、非行少年教護

といった当時未だ殆ど世間的関心を持たれていない暗黒世界に光を投ずることを生涯の職業 (Beruf) として選ばしめるような要素があつたのだろうか。それは既に述べたように、彼は新島の平民主義に徹底的な人間平等の原理を見出し、多くの宣教師の生き方や思想に応用的キリスト教としての社会事業志向を見出すことができた。また学生たちは宣教師から当時我が国では未だ新しい学問であつた経済学や政治学を学び、キリスト教社会学は学生をキリスト教ヒューマニズムの観点から現実社会に眼を向けさせた。また同志社英学校での教育及び寮生活によつて、学生は人格の尊厳、自治・自立の精神を培うことの大切さを認識することができた。

このような留岡在学当時の同志社を支配していた精神は主に創立者新島襄の教育観・世界観から滲み出たものといえる。即ち新島が九年間ニューイングランドで中・高等教育を受け、ヨーロッパにあつて彼が学びとつたものは、欧米文明を支えているものがデモクラシー(平民主義)とキリスト教と全人教育であるといった点であつた。そしてキリスト教の中でもとりわけピューリタニズム、その中でも最もラジカルなコングリゲーショナルリズム(会衆派教会主義)が新島の信仰の中核に据えられていた。デモクラシーとピューリタニズムは各々個人の人格の尊

厳、良心、自由、自主独立、自治といった基本概念を共通にもち、とりわけコングリゲーショナルリズムは教会の独立と自治、個人の悔い改めの自覚及び良心の自由を尊重し、神の栄光を実現させるために実践活動を重んずる点の特徴とする。

会衆派教会と密接な関係をもつフィリップス・アカデミーとアモスト・カレッジとアンドーヴアー神学校で学んだ新島には彼の生き方、思想にコングリゲーショナルリズムが浸透していたことはけだし当然であつた。新島のいう「世の中の為」がそうであるし、社会の底辺にあつて人格の尊厳を踏みにじられ、自由を奪われ呻吟している人々に手を差しのべる行為こそ神の喜びたまうものであつた。従つて同志社には、学生たちがはなやかなフットライトを浴びる政財界で活躍するのではなく、「地の塩」、「世の光」として遊郭や監獄の改良に関心を向け、それらを畢生の事業に選ばしめる要因があつたといえよう。

留岡は「余を語る」という随想の中で次のように述べている。

私は元来貧家に生まれ、且つ幼にして身体虚弱なり、
ため、小学校も半途で退学したほどであつたが、
漸く長じて基督教を信じ、更に京都同志社に学び、

生涯の基礎をこゝに造ることになったのは誠に此上もない仕合せだったと思ふ。殊に同志社在学中、人間社会には二つの闇黒な方面、即ち一は遊郭、一は監獄のあることを知るに至ったのは、私が社会問題に逢着した最初のもので、これが引続いて今日に至るまで、多くの影響を私に及ぼしている。當時に於ては遊郭問題や監獄問題は世人の注意を惹くこと極めて鮮く寧ろ漫然看過されたといふ方が適切であつたと思ふが、私は基督教の光を以て此二大闇黒面を照らすの必要を認め、二者のいづれを選びて畢生の事業と為すべきかに就いて種々考慮する処あり、終に身を以て監獄改良に当るべき決心を為し、偶々同窓の友人から斯道の鼻祖とも云ふべき『ジョン・ハワード伝』を借覧するに及び愈々其の決心を堅うするに至った。^⑩

留岡にとつて同志社の雰囲気は、そして新島の教えは彼が生涯にわたって勇往邁進することになったキリスト教の伝道、監獄改良、非行少年の教護、地方改良といった事業を選ぶ上で重要な動機になったといえる。

留岡幸助は新島襄の教えを受け、彼の遺志を継承した人々の一人に数えられるであろう。

(大学文学部教授)

〈出典〉

- ① 『日誌』『新島襄全集』 5 P. 197
- ② 年来的の期待が実現されし喜び』『人道』第一九七号(大正十一年一月二八日)
- ③ [同志社創立十周年記念演説]『全集』 1 P. 105
- ④ 同 右 P. 107
- ⑤ 横田安止宛書簡 明治三十二年十二月三〇日『全集』 4 P. 306
- ⑥ 『留岡幸助日記』第一卷 P. 3 矯正協会 昭和五四年
- ⑦ 同 右 P. 6
- ⑧ 『日本組合京都基督教会五十年史』 P. 9 昭和十年
- ⑨ 『留岡幸助日記』第一卷 P. 19
- ⑩ 蔵原惟郭宛書簡 明治十八年十月九日『全集』 3 P. 364
- ⑪ 『現代基督教の不振』『留岡幸助君古稀記念集』 PP. 160-161
- ⑫ 『天何をか日はんや』『留岡幸助著作集』第四卷 PP. 416-417
- ⑬ 『余と語る』『留岡幸助君古稀記念集』 P. 1

深井英五と新島襄

——新島から学んだ「実践的人生観」——



杉江雅彦

同志社が生んだ、ただ一人の日銀総裁

同志社出身者で経済界に身を投じ、名を成した人物は決して少なくないが、日本銀行総裁にまでなった人は深井英五ただ一人である。しかも深井は、新島襄から直接奨学金を手渡されながら、同志社普通学校を卒業している。そこで本稿では、新島の弟子達の一人として、深井英五についてふれてみようと思う。

深井は昭和金融史の名著としても評価の高い自叙伝『回顧七十年』のなかで、つぎのように書いている。

「私の一生に於ける進路の方向を決した最大契機として挙ぐべきものが三つある。一は、新島襄先生の眷顧により同志社教育を受けたること、二は、徳富蘇峰先生の指導により国民新聞の門を経て世の中に出たこと、三は、松方正義公の知遇により大蔵省および日本銀行に就職したことである。人生の心構えに就いては、新島先生に負ふ所が最も多く、学究的傾向から移って社会の実勢に関心をもつようになったのは主として徳富先生の感化により、財政経済の方面に実行の立場を与えられたのは松方公の御陰である」

深井英五は、日本銀行在職期間が最も長く、三十六年間におよんでいるが、当初から日銀に就職したわけではなかった。まず、同志社時代の上級生であった徳富蘆花の兄・蘇峰が主宰する国民新聞社に勤務し、外報部長にまで昇進したし、その後、わずか三カ月間という短い期間ではあったが、松方正義大蔵大臣の秘書官をつとめたことがある。その松方の推薦によって、明治三十四年十月に日本銀行に入行し、それ以後、国債局長・営業局長を経て大正七年四月に理事に就任した。さらに昭和三年に副総裁、十年六月総裁となり、十二年二月に総裁を辞任した後、貴族院議員、枢密顧問官にまで列せられた。

しかし、なんといっても深井にとつて心血を注いで精励したのは日銀時代であつて、とくに副総裁・総裁の在職期は国債の日銀引受け、金解禁・金本位制度の離脱など、日銀にとつて実に重大な決断を迫られた時期にあたる。これらの難問に対応した責任者としての深井に対する評価は、かならずしも一致してはいないが、つぎのような指摘は、深井に関して最も的を射たものと思われるので紹介しておきたい。

「深井英五の一生を通じて貫いているものは、まじめに最後まで筋を通して物を考えるという精神で、総裁の治績ということを離れその知性の高さ深さという点からみるならば、なんといっても、歴代の日本銀行総裁中の第一人者であり、この意味で日本銀行の生んだ偉大な人物の一人であつた」(吉野俊彦『歴代日本銀行総裁論』二四二ページ)

信仰を通じて新島と出会う

深井英五にとつては、松方の知遇を得たからこそ日本銀行に入行し、そこで彼の持てる力をフルに発揮する場が与えられたのであるが、松方に深井を紹介し推薦したのは徳富蘇峰であつた。徳富に出会つたのは、同志社時

代の上級生で蘇峰の弟・蘆花、あるいは同級生・平田久を介してであったから、深井が同志社で学んでいなければ、その後の彼の活躍の場は、別の形で現れたにちがいない。そして深井が同志社に入学し得たのは、彼と同郷人であった新島襄に見出されたからであった。その意味では、深井の人生の出発点は新島によってつくられたといっても過言ではない。現に深井自身が「人生の心構えに就いては新島襄先生に負ふ所が最も多い」と回顧しているのである。

深井英五は現在の群馬県高崎で、旧高崎藩士深井景忠の五男として、明治四年十一月二十日に生れた。父・景忠は高崎藩では百五十石を食む「中の上」程度の武士であったが、明治四年の廃藩置県を機に隠息してしまつたから、家計は苦しく、十四歳で小学校を卒業した深井は、中学校への進学をあきらめざるをえなかつた。

しかし、学問好きの深井はそのまま小学校の授業生(助教員)となつて、いくばくかの月給を得ることができたので、若干の書物を買うことが可能となつた。それで英語を学んだり、いろいろな書物を読み漁つたものの、それだけでは前途の見込みが立たず、焦燥の揚句、深井は東京で働きながら学ぶことをのぞんで、両親には無断で上京した。十五歳のときである。しかし、頼つて訪ねた

母方の伯父の説得により、いったん帰郷している。

ところがその翌年、深井の癒^いしがたい向学心を満たす絶好の機会が訪れた。新島の出現である。明治十九年、新島は米国人であるブラウン夫人から委託された奨学金の対象学生を物色するため、郷里の群馬県に帰省した。すでにキリスト教徒となつていた深井の信仰上の師で、高崎基督教会牧師の星野光多は、深井を新島に推薦し、その結果、深井は明治十九年秋に同志社普通学校への入学を許可された。

深井は星野光多との出会いについて、つぎのように言っている。

「提先生(深井が通つた高崎小学校の校長で、深井は課外に提先生から漢学を習つていた¹¹筆者注)は、自ら英語に通ぜざるを遺憾とし、私には是非之を学べと勧めた。私は其の勧めに従つて星野光多先生の教を受けるやうになつたが、更らに之を機縁として一たび基督教を信じたことは私の一生に於ける大事実の一つである」

つまり深井は、星野から英語を学ぶうちにキリスト教信者となり(十五歳で洗礼を受けた)、キリスト教と理性とを調和する思想を構築して、それを世に伝えるのが「私に恰好の仕事である」と認識しはじめたところへ、

新島によつて奨学金つきで同志社に学ぶ機会を与えられたということになる。

新島から学んだ「実践的人生観」

喜び勇んで京都にやってきた深井は、新島から直接、奨学金を手渡される関係上、一般の学生よりも新島に接する機会が多かった。深井にしてみれば、会う度に新島から勉強や人生についての激励を期待したにちがいないが、新島は深井がかねて聞かされていたような熱烈な言動を深井には示さなかったらしい。むしろ淡々とした態度で深井に接したものだから、「先生は私に対して格別関心がないのかと思った」と、深井は落たんした。しかし、新島が亡くなった後で八重子末亡人にたずねたら「襄は平生屢々あなたのことを話していました」ということを聞かされて、深井は、「先生は私の生い立ちを聞き、其の頃の心情を洞察して、之に適応する薰陶を施されたのであらう」としみじみ述懐している。

しかし新島は、折りにふれて深井に対し、人生の心構えを説いて聞かせた。それも、とくに訓誨するといった態度ではなく、自身の自己修養の体験を語るという風であったらしい。深井は、同志社時代に新島から人生の心

構えを教えられ、自らの人生観の基礎を作っていた。

このころ、深井の心に残った新島の言葉については、『回顧七十年』の文章がこれをよく伝えている。

「私の心に残った印象を要約すれば、第一には、自己の信念に立脚しなければならぬ、付和雷同や、誤魔化してはいけな」と云ふことであつた。第二には、単に自己生活の爲めに働くのではない、世の中の爲めになるやうに心掛けなければならぬと云ふことであつた。『世の中の爲め』と云ふのが先生の常用語であつたが、此頃謂ふ所の奉仕の觀念に該當すると思ふ。世の中の爲めになると云ふのは必ずしも大事業を成すのみに限らない、分に應じてそれだけの途があると云はれた。第三には、何か仕事をしなければいけないと云ふことであつた。仕事と云うのも広い意味で、思索研究の如きも其の内に含むと云はれた。先生の趣旨は、仕事の種類の如何を問はず、世の中との接触を必要とし、独善高踏を戒しむるにあつたと思ふ」

もつとも新島は、深井に対して右のように順序立てて説いたのではなく、多分に深井の主観的な解釈も混っているものと思われるが、深井の述懐によれば、『自己の信念』、『世の中の爲めに尽す』、『仕事をする』是等三つ

の言葉を屢々先生の口から聴いたことは確かである。それが訓誨ではなく、先生の胸中を吐露される如く聞えたので私は一層深く感動した。神を父とし、人間を同胞とする教理の応用として、私の実践の人生観の基礎が出来たのである」ということになる。

深井は同志社卒業後しばらく職につかず、真理や人生の価値基準について懐疑的になり、あるいは当面の生計の立て方についても苦しむなど、懊悩の日々を送った。しかし、そんな深井を危機から救ったのは、かつて新島から教えられた実践的人生観であった。

「私は『仕事をしなければならぬ』と云う訓言を想起して之に邁進すべく決心したのである。仮令人生価値の規準は徹底的に判らなくとも、行住坐臥、一々理由を糾すの違はない。現存する社会の常識と自己の直観とを調合し、環境の遭遇に応接して出来るだけの実践を期すべきのみと観念した」

深井が同志社在学中に知り合った友人には、上級生に安部磯雄・徳富健二郎（蘆花）・津下紋太郎などがあり、また下級生には山室軍平・古谷久綱・三宅驥一・近藤賢二などがいたが、なんといつても、同級生・柏井園・今泉真幸・北里蘭などの中で最も親しかったのが平田久であった。

この平田は、同志社を卒業してすぐ、徳富蘇峰が主宰している国民新聞社に入社しており、彼は前途の方向について迷っている深井を、蘇峰に紹介した。蘇峰は最初、深井に外国新刊書のダイジェスト版を書かせて出版し、生活の糧を得させたが、明治二十六年末からは国民新聞社の正社員として採用した。すでに「環境に適應する実践本位の人生観に傾きつつあった」深井は、蘇峰の好意に感激し、与えられた仕事に全力を尽した。最後は外報部長に昇進した深井は、しかし国民新聞社の事業縮小から転身の必要性を感じ始め、それを察知した蘇峰の紹介により、松方蔵相の秘書官に転出したのである。明治三十三年夏のことだ。

金解禁・輸出再禁止に示した実行力

ところが松方が大蔵大臣の地位にあった山県内閣が、深井の蔵相秘書官就任後わずか三カ月で更迭されたため、深井はまたまた浪人の身になってしまった。しかし、こんどは松方正義の斡旋により、一年後の明治三十四年十月に日本銀行へ入行することになった。

日銀に入った深井は、ここでも「実践的人生観」により、与えられた仕事に没頭したことであろう。その成果

はトントン拍子の出世を彼にもたらし、大正七年四月には理事、昭和三年六月には副総裁にまですんだ。とくに副総裁となつてからは「彼は土方総裁の七年にわたる在任期間中、副総裁としてこれを助けたということになつてゐるけれども、土方総裁時代は実質的には深井総裁時代といつてもけつして誤まりではないくらい、土方総裁は金融政策に関してはまったく深井副総裁の意見にこれ従うという状態であつた」らしい（吉野氏前著、二二五ページ）。

したがつて、深井の日銀における治績を語る場合、副総裁としての職にあつた昭和三年六月から総裁を辞めた十二年二月までの期間にわたつて考えなければならぬ。この間における金融政策上の大問題は、金解禁と金輸出再禁止であつた。このいずれの措置にも、日銀が深く関わり合つてゐることはいうまでもないが、殊に深井の判断と配慮は、政府の意思決定にも大きな影響を及ぼした。

まず金解禁であるが、大正六年にそれまでの金本位制度を事実上停止して以来、金本位制を復活して為替相場の安定をはかり、貿易を振興させることによつて、不況を打開しようとする強い要望が財界の一部および民政党に根強く残つてゐた。それを受けた形で、昭和四年七月

に成立した浜口・民政党内閣は、井上準之助蔵相のもとで金解禁を断行したのである。

このとき、土方総裁のもとで「実質的には深井総裁」といわれた深井が持つてゐた見解は、堅実な経済活動を行ふためには為替相場が安定していることがのぞましい。それには金解禁が必要だ。しかし、準備も整わないのにいたずらに金解禁を断行することには慎重でなければならぬ、というものであつた。深井は元来、金解禁論者ではなかつたと思われるが、このころには金解禁に傾いてゐたようである。

ところが、政府と日銀、あるいは民間金融界などが一致して実現を期待した金解禁は、結果において失敗に帰し、わずか二年足らずで再び金輸出は禁止された（つまり金本位制度からの離脱）のである。政府ならびに日銀が周到に用意して金解禁にのぞんだにもかかわらず、それが短期間のうちに失敗した理由は、(1)金解禁の意義や影響について事前に十分な理解を持たず、むしろ重大な錯誤があつたこと、(2)金解禁が技術面において大きな欠陥を持つてゐたこと、(3)金解禁の時期が世界恐慌勃発期という悪タイミングであつたこと、(4)英国を中心に世界的に金本位制が崩壊していく過程にあつたこと、の四点に集約することができる。

昭和六年九月二十一日に、英国が金本位制を停止したことが契機となって、わが国でもいよいよ金再禁止論が火を吹き始め、十二月十二日に突如総辞職した若槻内閣にかわって登場した犬養・政友会内閣の手で、直ちに金輸出再禁止が断行された。この内閣交替前後の三日間、深井はこの重要問題に深く関わった。金解禁が失敗に終わったからには、早急に金から脱却して管理通貨制に転換しなければならぬ、と決心した深井は、次期蔵相候補と目されていた高橋是清を訪ね、金輸出再禁止を強く献策している。そして、犬養内閣成立と同時に金輸出再禁止の大蔵省令が発せられたのである。

こうした深井の実行力は、若き日に新島から学び、自分の心にも深く刻み込んだ、「実践的人生観」をその源泉としているように思われる。深井は言う。

「基督教の信仰に就いては新島先生の期待に背いたが、人生の心構えに就いて先生に負う所は広大である」

(大学商学部教授)

『創設期の同志社』

——卒業生たちの回想録——

初期の同志社を話するときの文献としてまずあげるのが、この『創設期の同志社』である。

収録されているのは、安部磯雄、深井英五、海老名弾正ら、英学校に学んだ四十六名。湯浅初子ら女学校に学んだ十五名である。

勧める理由は、読みやすく、しかも面白いからだ。構えて書いた堅苦しい歴史叙述ではなくて、ざっくばらんに在学時代の思い出を語った談話を要約筆記したものだからである。

彼らはいと楽しみに、寮、授業、娯楽、食事、宗教活動など、当時のいわゆるキャンパス・ライフを語る。関連して新島襄、デイヴィス、ラーネッド、山崎為徳らをはじめとする教員たちの思い出を語るのである。すべてが生き生きとしている。面白くて読みやすく、しかも従来あまり明らかでなかった初期同志社の側面がえがかれていて、資料的価値も高い。だれよりもまず、学生生徒諸君にぜひ読んでもらいたい本である。

頒価一、五〇〇円

発行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課

(〇七五—二五一—三〇三七・八